

あすを語る

●務台理作●江戸英雄●田中一松
●千田是也●斎藤秀雄●浅野建二
●伊藤桂一●山口 瞳●扇谷正造
●生江義男



桐朋選書

あすを語る

私自身、これまでの人生において、数多くの恩師、先輩の「胸」を借りてきたのだが、省みて、その「ぶつかり」が、満足のいくものであったかどうかは、甚だ疑問が多い。

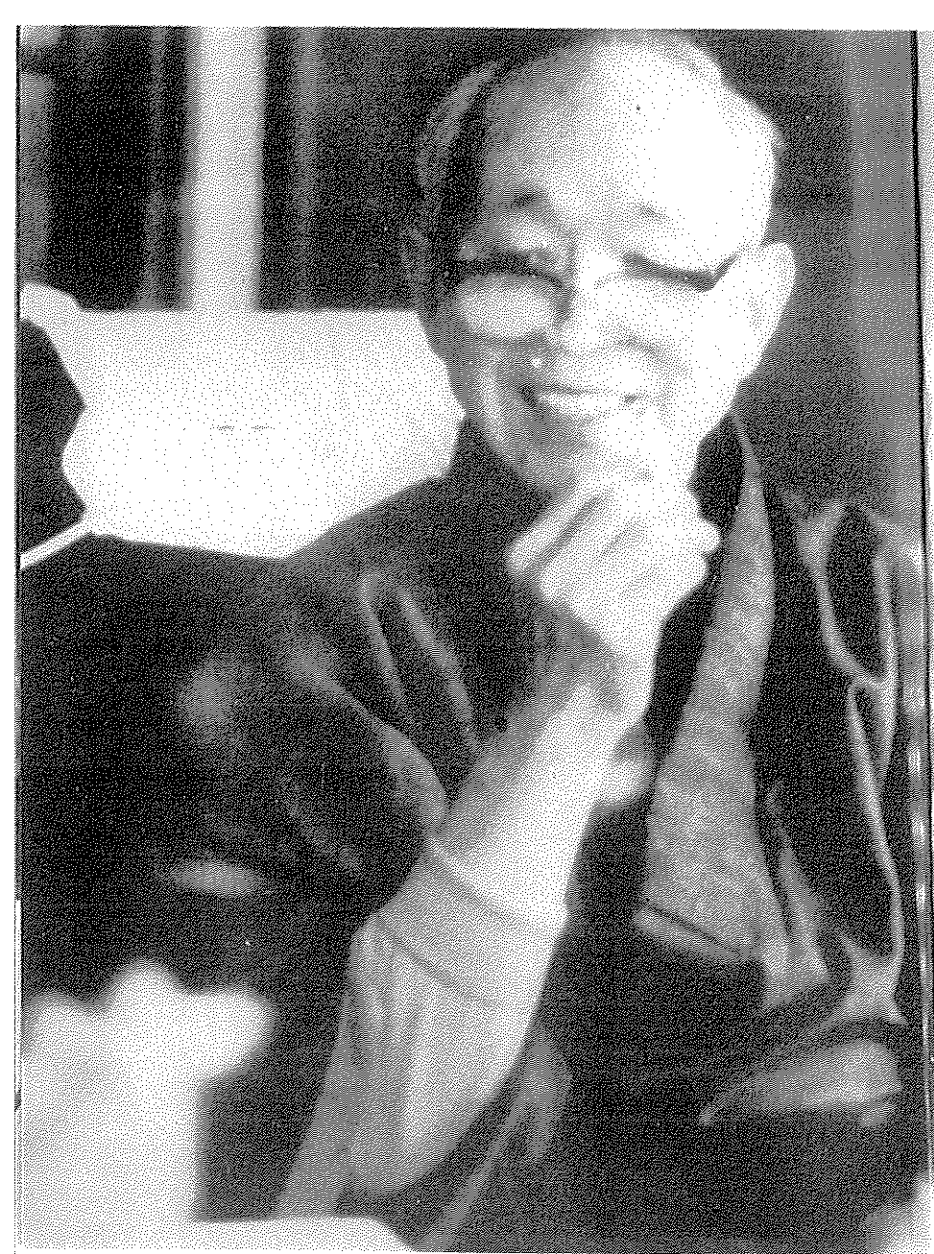
その意味で、永年にわたって指導を頂いた方がたにお願いして、もう一度ぶつかってみたのが、この「対談」である。

この「対談」が、私だけのものであっては意味をなさない。……桐朋で自己の形成に努めている学生、生徒の諸君が、私を媒体として、直接、この「対談」に参加するということになればならない。

生江 義男



桐朋選書



▲西田幾多郎先生——きびしい人でしたね。だいたい先生は、あまり細かいことを言わないんです。いつもじっと見つめられているような感じを受けた人ですね。 務台 理作

親鸞の境地に

「いつか、山伏姿の君と酒を飲んだことがありましたね」

対談後、務台先生がボツンとおっしゃった。

それは、昭和二十七年秋の桐朋学園十周年記念式の夕方のことである。

やっと、その年、現在の校長室、事務室のある本造館が落成し、はじめて桐朋に玄関ができたときである。

麦畑あとの運動場の一角に舞台をつくり、教師中心の記念演劇会を催した。

当時、東京文理科大学に歌舞伎研究会があり、千葉斐、町井陽子、小木新造教諭らは、その会員だった。そんなわけで、私が弁慶役で『勧進帳』で迷憊ぶりを発揮したのを、先生が覚えていてくださったのである。

私が直接、先生の講義に接したのは、昭和十四年の一年間にすぎない。しかし桐朋に職を奉じてから、たえず先生の聲咳に接し得たということはなによりの仕合わせであった。

西田哲学の継承者として、先生は八十一歳の今日まで、わが国思想界の先達としての歩みをつづけてこられた。

「進歩的思想は、切り花々的なものではなく、思想以前の民衆の生活意識の中にどっかりと根をはっていなければならぬ」

先生の、このお言葉は、常に「実践」に裏づけられているのである。そして、それは、親鸞の「教・行・信」の境地につながるものだと、私は確信する。

桐は春によし秋によし

生江 先生が桐朋の男子校と女子校をお引き受けくださいましたのは、昭和二十二年の十二月のことでございましたね。

務台 名前だけは、両方の校長でしたがね。

生江 私たちは、先生が桐朋をお引き受けくださったことから、今日の桐朋が出来上ったのだと思っいつも感謝しております。

ところで、そのころの様子はどのようなものでしたでしょうか。お引受けになるに当っては山学園の方がたが先生のところへお願いに上ったのでしょうか――。

務台 山水というのは一種変わった学園でして、学校側などはありませんでしたからね。学校は、わりあい自由なように見えました。高等師範系のほうが少なかったかな。ただ、田中寛一（東京文理科大学教授）さんが理事長になっていましたね。それで、山学園の始末が問題になったときというのは、男子のほうは陸海軍の将校の子弟、女子のほうは陸海軍の将校の子女を中心にした財団法人の学校でしたから、占領に当った進駐軍が睨んだのですね。しかし、どういう理由があるにしても、「山水という名前はいいな」と思いましたね。創立者の山下亀三郎さんの「山」、男子校の校長の清水喜重陸軍中将の「水」を取って山水にしたというような

噂もありましたが（笑）。ともかく、山水という名前はいい名前で、これを変えるのは実に惜しいと思ったですね。

ところが、当時、文部省から、名前を変えて東京文理科大学と東京高等師範学校（現在の東京教育大学）が責任者になってやるか、廃校にするか、どちらかにせよ、という二案を突きつけられ、学校側は追い詰められていたわけです。ぼくは文部省に呼ばれて、どうだと言われしました。あれは、昭和二十二年のいつごろでしたかね、文理科大学の教授会のほうを先にやったところが、みんなもらってしまっただけでね。高等師範臨時の幹事長は花井重次教授の教授会でも異議がない。文理大と高等師範がいっしょになってやろうじゃないか、名前は第二の問題だということでした。ただし、やるならわれわれのほうに全部まかせてもらおうということになり、山水学園の理事会と話をしたら、山水の旧関はいっさい手を引くつもりだから文理大と高等師範で責任を持って引き受けてもらいたい、そうすれば、名前はそちらのほうに譲ってもいい、ということでした。山水中学校の校長の清水喜重陸軍中将は、軍人には珍しい人でした。

生江 文化人でいらしたですよ。

務台 絵をかき、書も堪能で、そのうえ俳人でもあったしね。私は、この人と茗溪会館（東京教育大同窓会館）の応接間で何回も会いました。そして相談したんですよ。「大塚（文理大・高等

師範）は桐の葉だから、桐と関係のある名前にしたい。その線で考えたらどうだろう」と言ったら、さすがに俳人ですね、「桐は春によし秋によし、夏は夏の趣があり冬は冬の趣がある。私は大好きだ。桐に関した名称でやられるのは賛成だ」ということで承諾されましたね、それで桐朋になったわけですよ。

市民教育への夢

だいたい文理大・高等師範が引き受けることになったのですが、はじめの案はね、文部省から大蔵省へ話してもらって、付属中学・付属高等学校にするつもりだったのです。というのは、ぼくにはね、それまでの高等師範の付属中学というのは一種の高級中学校でね、決して「市民教育」とはいえない。それで、どうしても市民なり国民なりに接触した中学校を持ちたいという考えがあったから、それに役立てたいへんありがたかった。文部省はその考えでいいと、賛成してくれたわけなんです。

ところが、大蔵省がボンと蹴ってしまった。大蔵省は付属学校というものを廃止しようと思っていたのです。官立学校の付属学校は、どういう種類にせよ切り離してしまう。付属学校をやるなら付属学校の体系を立てて、その体系でやるべきだ。ある学校のための付属学校というものはやめよう。付属学校として理想的にやるならば、これまでの関係を離れて独立し

と、私は責任者として二年ぐらいやりましたかね。

生江 山水から新しい桐朋の誕生への経緯をうかがい、私たちも、これからの桐朋の教育のなかで、先生の持たれたビジョン——市民教育への夢を、ぜひ実現してゆかなければならない

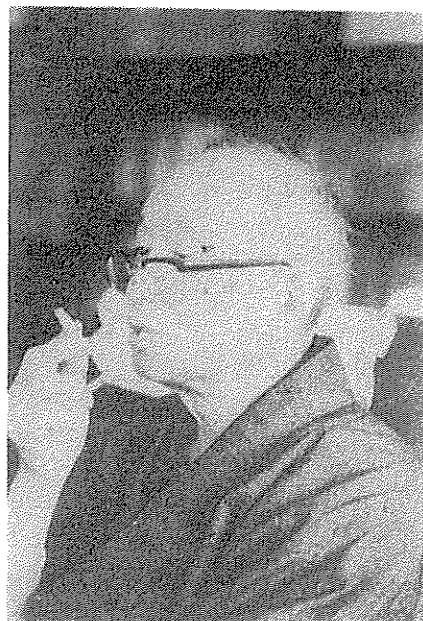


いまいや どうも

も相談をしました。

生江 先生は、そのころから「市民教育」ということを考えておられたのですね。付属というものの性格は、現在ますます特殊階級のものになってしまっているようにみえますが。

務台 その点、意見も違いましたね。付属学校ということでなければ独立学校。独立学校としてやってゆくとすれば、従来



私のあなたに対する期待は大きい

校長は必ず東京文理科大学から行くような建て前にして、絶えず連絡を取り、教育方針はだいたい大塚の方針で行くということで従来の付属学校の性質を確保すること。これには大蔵省はむろん賛成で、文部省も賛成。進駐軍も、とにかく当時の文理科大学と高等師範が責任を持つてほしい、全責任を持ってやってももらいたいということで何回

た付属学校としてやるべきだということで、大蔵省は付属学校廃止論の建て前から一歩も譲らないわけです。文部省は両方いるという考えで、都会的な付属学校と地方的な付属学校と両方ないと付属学校は十分な研究が出来ないといったのですが、結局、大蔵省は金を握っていますから文部省も負けてしまったのです。

結局、付属学校としては引き受けられないということになり、教育に熱心なということを目にして、先生たちの協力学校にしようということになりました。まあ、準付属学校ですね。

とつよく思いますね。

生みのくるしみ

私が桐朋学園に参りましたのはちょうど昭和二十三年の四月でしたが、当時は教育大学創設にともなう文理大、高等師範の問題で先生が大変ご苦労なさっていらしたときですね。よく学長室にお邪魔させていただくと、とにかく桐朋というものができたから、お前たちがひとつしっかりやってみるとおっしゃっていただきました。あれからちょうど二十三年になるわけですが、男子校も女子校もおかげさまで、なんとかがんばってやっております。

私が初めて桐朋に伺いましたときは女子部の卒業式でございましてね、式場に先生がおいでになってお目にかかりました。

務台 そうでしたね。

生江 ところで、先生は桐朋のほうにはよくおいででしたでしょうか。

務台 あの頃は、とにかく忙しくてね、桐朋のほうへもそんなには出られなかったですよ。

生江 先生が桐朋の両校の校長をなさって下さり、主事を両方に置かれましたね。先生がお辞めになると、今度は教育大学から私のほう（女子校）には木代修一教授、男子校は熊井甚太郎教授が兼任校長としておいでになったわけでしたね。

務台 そうでした。あなたがきたころの女子校のほうの中心になっていたのは――。

生江 高師の大先輩の船引真造さん。

務台 船引さんはいい人でしたけれども、どうも（笑）――その下には――。

生江 松橋さんがいました。いや、私がちょうど先生や花井重次先生に呼ばれてまいりましたころ、あのおふたりのいさかいには、とても困りました（笑）。

務台 実際、ふしぎなのは、突然、文部省から、山水の敷地の問題で話したいから来てくれというので行っただころが、「旧校長はいいさい学校へ出てはいけない建て前になっているのに、出てくるのは困る」と言う。私は校長だが、めったに行かないので、どうしてそういうことがわかったのかわからない。清水さんは学校のなかの校宅に引きつづいて住んでおられたから、何か用事があって出られたのかと思うのですけれども、学校の将来のことに關しては言うはずはない。私は信じられないので「何か間違いでしょ」と言ったが、文部省のほうはデータを持っている。とにかくすぐ出てもらいたいと言う。清水さんにすれば家は焼けてしまっただけで困っておられた当時なので、とてもお気の毒でした。それからどこへ行かれたのかはわかりません。

生江 幡ヶ谷のほうに移られました。ちょうどそのころ清水閣下のお嬢さんが私のほうに来ておりまして、私が参りましたときは中学校の二年生でした。非常な秀才でして、今は大学を卒業され、立派になっておいでです。

務台 そうですか、その事情を、私はよく存じてはいなかったのです。

生江 あのところ、よく投書が先生のところに「内容証明」でどんどんよこされるので、先生も教育大学の設立という問題をお抱えになりながら、本当に大変でいらしたと思うのですが。

務台 なかに妙な先生がいて、私のところや文部省にいろいろ投書してよこすのですね。とにかく、最悪のときだったですね。桐朋学園も、教育大学もどこから手をつけていいかわからない。

帰国生徒ととりくむ

生江 桐朋では、さきほど先生のおっしゃった市民教育のための学校というお考えや、あるいは教師相互の研究、そういう面を私たちも考えてやってまいっております。女子部では、特にいろんな面で、日本であまり出来ない教育をやってみようということで「音楽科」を作ったり、「演劇科」を作ってみました。私の考えでは、それこそ国・公立大学の付属小学校、中学校、高等学校が海外から帰った子供たちの教育を引き受けるということを前から申しているのですが、なかなか国・公立校ではいたしません。今、海外には五千人近くの子女が行っておりますが、その子女の教育は親にとっても国にとってもいちばん大切でございます。そこで、それなら私たちが引き受けようと、現在、外国から帰った二百人ちかくの生徒が私どもの学校にお

ります。

務台 ほう、そうですか。

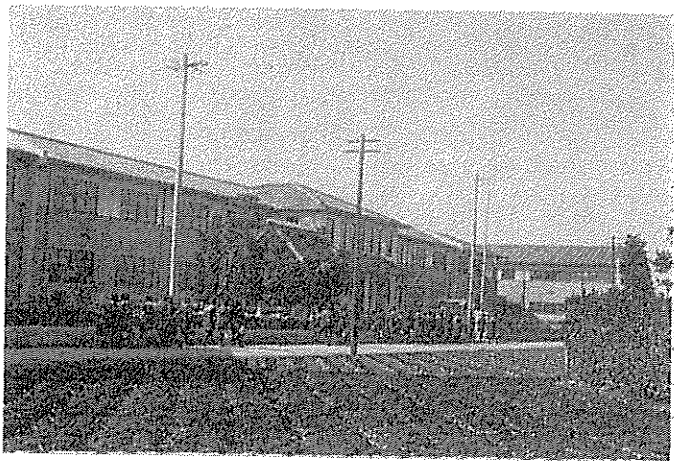
生江 全世界から帰って参りました生徒がおりまして、そういう生徒たちは国語教育が不足だとか、内地の教育に比較すると多少進度などが遅れていたりしますけれども、語学力とか物の考え方は実に素晴らしいものを持っています。私たちも比較教育といいますが、たとえばドイツの教育について本では読むんですが、実際、ドイツから生徒が帰って参りますとその生徒の実際の体験から、今のドイツの教育というものを身近に感じることができます。その点では、われわれとしても勉強になる面白い教育をいま行なっているのでございます。

務台 なかなかおもしろいですね。そういう生徒がそんなに多いのですか。

生江 はい。ただ、問題なのは、私どものところは小学校は男女共学ですが、中学校・高等学校は女子だけなものですから、女子は取れるのでございますが、男子の問題があります。ご承知のように国立のほうは受験の関係もあって、帰国生徒の編入もなかなか問題があるようですが、このごろは男子校のほうでも、いろいろ先生がたにご協力いただいで、しだいに外国から帰って参りました生徒もふえております。

務台 このごろは、男子校と女子校と生徒を交換しているのではないのですか。

生江 交換とまでは行っておりませんが、小学校から中学校へ上がるときは、こちらの男子は男子校に参りますし、向こうの小学校の女子はこちらの中学に参ります。そういう点はよく



山水女学校 昭和17年竣工当時の様子 中央は奉安殿

やっております。私学もこれからは脱皮の時期で、この前も男子校の先生がたと理事会で、両方でもっと一緒に力を合わせて新しい日本の教育を考えてゆきたいと話をいたしました。せっかく、務台先生がご苦勞なさってお作りになった学校ですから、われわれが実のあるものにしてゆかなければ申しわけないと、いつも思っている次第でございます。

学制改革

務台 それはたいへん結構ですが、問題は山ほどありますね。だいいち、大塚が問題（笑）。生江 ええ、大塚がね。先生が学長でいらしたころの、文理大、高等師範の新制大学への統合の問題も大変でございましたね。

務台 いろんな意見が出ましてね、なかなかむずかしかったですよ。そのうち、私は定年になって辞めましてね。あとの柴沼さんは、文部省関係のえらい人だから、わりあいスムーズに行ったのですけれどもね。

生江 私たちがあとから当時のことを考えますと、高等師範を教養学部にして、文理大を大学部、あるいは大学院にすればよかったように考えますが、そういう構想はなかったのでしょうか。

務台 文部省のほうで、高等師範を大学にすることは考えなかったのじゃないかな。

高等師範をそのまま大学にすることは、文理大でも望まなかった。四年制にすることはいいが、すでに文理科大学があるのだからと。今いわれたような話も出ましたけれども、あれをいっしょにするときは、なかなかむずかしかったんですよ。

生江 今度の教育大の筑波移転の問題も大変でございますね。

当初は、先生のお考えにより、東京文理科大学、東京高等師範学校が桐朋を引き受けるのだということで出発したわけですが、このごろは、東京教育大学との関連自体も新しく考え直さなければならぬ時期に来ているように思います。

務台 いまの教育大学の筑波移転の問題は、ぼくには何も相談がないんですよ。現在の問題については名譽教授は完全にツンボ棧敷に置か

れているわけですね。またタッチして中にはいるほどの材料ありません。しかし、それにしても、むずかしい問題だと思いますね。

生江 先生が先ほどおっしゃいました付属問題というものが、筑波の新大学構想でも今また新しく問題をかもしているようでございますね。

務台 そのようですね。最初は、教育大学は大塚に置いておくという線が強かったんです。ところが、あそこではやれない学科が出てきたんですよ。たとえば物理学なんかはもともと人口の密度の少ない所に行かないとやれない。あそこでは絶対にできない。物理学にはそういう必要性があります。それから、体育学もだめ。これも、新式の体育施設を基礎に新しくやってゆかなければならない。それから農学部も一応の体裁はできたのですけれどもね、まだこれからです。筑波の問題はね、実際のことはよくわからないが、はじめにそういう考えがあつて表に出さずにやっていたのか、中途で変わったのかわからないが、実は工業大学を作ることを中心なんです。文部省が全く新しい工業大学を作ろうという案をこしらえて、それに農学部も入れ、工学部・農学部を中心にしてやってゆく。それには教育大学がいいだろうという線が強く出てきた。だから教育大学の筑波移転は、露骨に言えば工学部と農学部のために持つて行くこうというような動きになっているんですね。ぼくは実態は知りませんが、だいたいその線に近づいているのではないですかね、筑波大学は。

生江 一つのモデル大学を作ってみようという考え方なのでございますね。

務台 ええ。

これからの女子教育

生江 日本も、平和だ、民主主義だということで二十五年歩んでまいりましたが、教育界では本当の意味での平和とか民主主義というものを、生活の中で、教師も父兄も子供も含めて努力してゆこうという考え方が少なく、ただ与えられたことばとしてだけ受け取っていた感じがいたします。

私が今いちばん考えておりますのは、公害問題とか交通戦争ばかりではなくて、生命の尊重ということですね。こういう面を学校教育の中にもう一度持つてこようと考えて、そのためには「心の健康」「身体の健康」ということを〃合いことば〃にしてやっております。

先生のお書きになったものをいろいろ拝見しても、現代社会では何かしら大きなワク——水槽の中で人間がうごめいているような感じがするのではないかと思うのですが、社会のあり方と人間との関係について、先生のお考えをお聞かせいただきたいと思ひます。

務台 いや、ぼくは老人でね（笑）。老人は、そういうことには口を出すべきじゃないと思うんですがね。もうあなたたちの時代だからね。これならということに、邁進してちっともさしつかえありません。



やはり人間をつくることが大事 高度の経済成長が進むなかで人間のあり方が問われている

歴史的に考えてみて、今は非常に重大な時期——転換期だと思うんですよ。輸出額が多いとか、国民総生産が世界第二位だとか、景気のいい話をしているけれども、これはそのまま信用できないと思うんですよ、一時の現象ですからね。世界の経済がどういうふうに変わってゆくのかわからない。まず、ほんとに健全な国民をつくるということが必要だと思う。何か、機械に引きずり回されてしまうような人間になってはいけない。やはり、人間をつくるのが大事じゃないですか。当然、新式の機械が使える人間ね。それには、昔風の^{大和魂}大和魂じゃなくて、新しい大和魂をつくるということです。

生江 私などもずいぶん長いこと教師の生活をして参りましたが、いま先生がおっしゃったような日本人のエネルギーというのは、先生がいつもおっしゃいますように、庶民の中にありますね。これが、だんだん^涸涸してゆくような感じを持つのですが。

務台 つまりね、極端なことに走るわけです。全体のバランスが崩れている。明治時代はずいぶん矛盾をはらんでいたけれども、とにかく日本人を偉くしようという線が続いて来たと思うのですね。そういう点をふり返って、しかし、前のようなやり方ではないというわけじゃないので、やっぱり新しいものを作り出さなければならぬから、みんなで新しいものを作り出してやってゆく。従来の教育というものは男子教育ばかり考えて、女子教育というものは付属物だった、そうじゃない。女子の役割というものは、いうまでもなく非常に大きいのです。

生江 ただ、内容的に見まして、いったい本当の女子教育は何なのかということを、私たちも常に考えております。私たちの考えでは、女性というものは、子孫を残してゆくという重大な責任があります。

務台 そうそう。

生江 私どもの教師のなかでも、男の子を教えるほうがはりがあるということをよく聞きますけれども、女子教育は次の世代の子供にまで影響を与えてゆく教育なのだと考え、未来に目標をおいてみんなでやっているわけでございます。

ところで、これからの桐朋は、こういうような教育をやっていったらどうだという先生の新しい時代の教育のあり方についてのお考えを、うかがわしていただきたいと思うのですが。未来の教育ということについて話していただきたいと思います。

務台 これからの桐朋は、男子校があるから女子校があるという姉妹校みたいな関係ではなかなかむずかしい。男子教育のほうにも問題があるけど、理想的な女子教育を中心にしていくことが、まず女子校にとっていちばん大事じゃないか。男子校でやるから女子校もやらなければならぬとか、女子校がやるから男子校もやらなければならないというふうなふりかえりから脱け出して、根はつながりがあるわけですが、やり方としては自由になって、女子校の教育は新しい日本の将来の女性のためということでやらなければいけないと思うんですね。その点、私のあなたに対する期待は大きい。

生江 いやいや、どうも。

水曜日の朝八時

務台 先生には、私が昭和十四年に東京文理大にはいりましたとき、「哲学概論」を教えていただきました。あのころはよくサボったものですが、水曜日の一時間目と二時間目だけは、先生の講義を何とでもうかがいたい。そのためには席を取らなければならないので、その日だけ朝早く起きて上野から駆けつけました。

務台 そう、朝八時からでしたね。

生江 そうでございます。

務台 八時からの講義だと、私も家を七時に出なければならぬ。

生江 あのころは、先生や高坂正顕先生がおいでになりました。ちょうど、先生は『社会存在論』を弘文堂からお出しになっておられましたね。

務台 そうでしたね。

生江 和歌森太郎さんのご本『日本民俗学』を見ましても、先生の「表層文化」と「基層文化」というものが考え方のひとつの中心になったように書いておられますね。

務台 あの方も、ご自分の学問を、りっぱにほり下げていかれましたね。

生江 今から考えますと「社会」ということは今日ほどに問題ではなかったかと思えますが、先生が、あの戦時体制がしだいにきびしくなっていたところに、ほんとの意味の自然と人間、社会と人間との関係を究明なさったことが、いまでもはつきり思い出されます。

新しいものをもってくる

ところで、先生がドイツへおいでになったのはいつごろでございますか。

務台 あれは大昔ですよ（笑）。

生江 大正の終わりごろですか。

務台 大正の終わりから昭和の初めですよ。その後二、三回行く機会があったけれども、い

ろいような事情で行かなかった。

生江 何年ぐらいおいでになったのでしょうか。

務台 二年ほどでしたかね。ベルリンとパリに。

生江 こんど対談させていただきます千田是也さんとか斎藤秀雄さんも、ちょうど先生と同じころにベルリンにいかれておりますね。

そのころは、第一次世界大戦が終わって、ドイツもある程度、安定期をむかえたころにいらしたのでしょいか。

務台 表面的には、安定した時期だったですね。ぼくが行ったころは、とにかく西洋には新しいものがいろいろあるので、新しいものを日本に持ってこようというそういう時期でした。そういう意味では、平々凡々の時代でね。留学生を非常にたくさん出した時代です。助教授は必ず外国へ行ったものですよ。助教授で二年行かないと、教授にしないということでした。もとは四年だったんですね。四年では長いというので三年になり、さらに二年になった。今は一年か二年ぐらいですが、これは人もふえて来たせいでしょうね。

私がヨーロッパに行ったころは、どこへいっても、わりあい、日本が外国人に驚異の眼で見られているような空気がありましたね。そのころは、日本がずんずんと伸びてきていたものですから。

学生の前で他の学生を批判しない

生江 先生は、西田先生にずっとお習いになられたのでございますか。

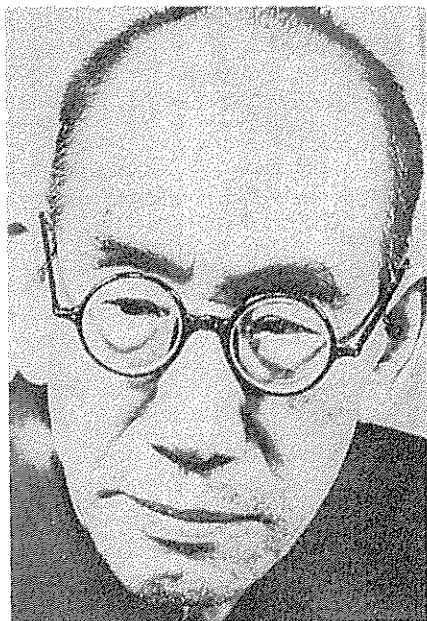
務台 西田先生には十一年ぐらいいたわけですよ。

生江 先生のお感じになられた西田先生は——私たちは『善の研究』や『哲学の根本問題』を拝見したり「絶対矛盾の自己同一」などという西田哲学のことばにふれたりしましたが、西田先生はどのようなお人柄の方でしたのでしょうか。

務台 きびしい人でしたね。だいたい先生は、あまり細かいことを言わないんです。いつもじっと見つめられているような感じを受けた人ですね。決して細かいことは言わない。何か持っていくと、いいとか悪いとかいうことを明瞭に言うんです。「そりゃだめだ」とか、「これは大いにやれ」ということをはっきり言われる。何か、学生に愛情を持っておられた。学生のだけれども、先生に信頼されていると思っていた。自分はどこかいとところがあって、それを先生が見ているというようなね。差をつけない。それと、学生の前で他の学生を絶対に批判しない。「あいつはいかん」とか「こいつはいかん」ということを絶対に学生の前で言わなかった。それはどこから来たのか、先生の天分なのか、それとも、先生の育ちからなのか——先生は東京育ちの人ではないのでね。

生江 金沢でいらしたですね。

務台 ええ。『善の研究』が出たのが、ぼくの高師師範の二年か三年のときですね。ぼくは『善の研究』を見て驚いたのです、こういう人がいたのかと。最初に西田先生に興味を持ったのは、まだ名が無く、金沢の高等学校のドイツ語の教師だったころ書かれたものを読んでからです。それは『西田幾多郎全集』の第一版にはないけれども、第二版の十六巻はそれを集めたものです。それを見ると、やっぱり純情な人だったと思う。



いつもじっと見つめている人

西田幾多郎氏

西田先生は逆境に置かれた人でしてね、はじめは石川県の師範学校にはいったのです。それから中学に転校し、金沢の第四高等学校（当時の石川県専門学校）へはいり、三年生の、卒業間際に退学されました。鈴木大拙さんなど前後して、三、四人でね。これは、学校に問題があったからです。四高になる前の石川県専門学校は県立学校

でしてね、自由主義だったんです。ところが、政府の方針が変わって、薩摩人を全国の学校へ配置した。四高へもやって来て、学校の方針が一変したんです。それに抵抗して卒業間際に退学してしまったので、先生は高等学校を卒業されていない。しょうがないから東大の選科にはいったわけです。退学しない連中は、本科にはいった。そのころの本科と選科の区別は、先生の書かれたものによるとずいぶんひどかったらしい。

東大の選科を出られた先生は、七尾にあった金沢中学校の分校の教員になり、一、二年やってから本校に呼ばれて、金沢に帰られた。それから第四高等学校の教員になったわけですが、そのときの校長が有名な北条時敬という人で、これは偉い人物だったらしいね。その人に呼ばれて西田先生は第四高等学校の教師になった。ところが、北条時敬が山口高等学校に校長として赴任したときに、西田先生を山口へ連れて行ったのです。そして一年ばかりおられたと思うのですが、北条先生は、東北帝国大学が創立されると総長に迎えられて仙台に行ったので、西田先生はまた金沢へ帰って、第四高等学校に四年いらしたのです。

生江 そのときに『善の研究』をお出しになったのですか。

務台 ええ。『善の研究』を出すまでに『西田氏実在論及倫理学』など二冊ほどの書物を出しておられます。

だれも見つめる者はなかったが、それを書いて基礎を作られたわけです。だから『善の研究』はいきなり書かれたものではないのです。

西田幾多郎 略年譜

明治3年(1870) 5月19日、石川県能登郡宇賀村誕生。父は哲三、母は寅三。
 明治16年(1883) 石川県立第一中学校に入塾。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治17年(1884) 石川県立第一中学校を退学。
 明治19年(1886) 石川県立第一中学校を退学。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治23年(1890) 学校の教育方針に満足できず、退学。翌年東京府立第一中学校に入学。
 明治27年(1894) 東京府立第一中学校を退学。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治28年(1895) 東京府立第一中学校を退学。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治32年(1900) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治33年(1901) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治34年(1902) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治35年(1903) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治36年(1904) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治37年(1905) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治38年(1906) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治39年(1907) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治40年(1908) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治41年(1909) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治42年(1910) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治43年(1911) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治44年(1912) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治45年(1913) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治46年(1914) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治47年(1915) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治48年(1916) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治49年(1917) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治50年(1918) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治51年(1919) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治52年(1920) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治53年(1921) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治54年(1922) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治55年(1923) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治56年(1924) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治57年(1925) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治58年(1926) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治59年(1927) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治60年(1928) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治61年(1929) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治62年(1930) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治63年(1931) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治64年(1932) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治65年(1933) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治66年(1934) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治67年(1935) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治68年(1936) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治69年(1937) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治70年(1938) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治71年(1939) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治72年(1940) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治73年(1941) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治74年(1942) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治75年(1943) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治76年(1944) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治77年(1945) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治78年(1946) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治79年(1947) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治80年(1948) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治81年(1949) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治82年(1950) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治83年(1951) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治84年(1952) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治85年(1953) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治86年(1954) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治87年(1955) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治88年(1956) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治89年(1957) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治90年(1958) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治91年(1959) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治92年(1960) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治93年(1961) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治94年(1962) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治95年(1963) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治96年(1964) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治97年(1965) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治98年(1966) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治99年(1967) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。
 明治100年(1968) 論文「純粋論と思惟」を著す。父の事業失敗のため、一家も貧へ移住。

『歎異抄』から『善の研究』へ

生江 西田先生が務台先生に「もしも日本に残す本が二冊あったら、きみは何を残すか」と言われて、先生が『万葉集』と『歎異抄』をお挙げになったら、「その通りだ」とおっしゃったということがございましたね。

務台 そう、そういうことがありましたね。

生江 先生は『歎異抄』はぜひぶんご愛読になられたのですか。

務台 『歎異抄』はね、高等師範の一年のときに、法語研究会というのがありまして、そこに近角常観という大谷大学の人を呼んで『歎異抄』の講義をやってもらっていました。一週に一度ずつ土曜日に来てもらってね。その影響を受けたということが、基礎にあるんです。そし

て一、二年たったころ『善の研究』(明治四十四年)が出た。初めは弘道館から出たのですがね。それを紀平正美さんが『哲学雑誌』で非常に誉めたのです。「日本に初めて哲学書らしいものが出た」と言って。それが高等師範の二年か三年ごろですね。それから『善の研究』の影響を受けたんです。そして長野師範の教員になった、一年だけね。

生江 先生は長野師範にお勤めになられたのですか。

務台 ええ。心理学の教師を一年やりました。それから京都大学に行って西田先生につき、十一年間いたんですよ。

生江 田辺元先生とは――。

務台 ちょうど入れ替えになったんです。京都大学に残っていた十一年間の最後の一、二年ぐらいが田辺先生と重なりましてね。田辺先生は東北大学の講師をやっていたのですが、それを西田先生が呼ばれて助教授にしたわけですね。そのとき、ぼくが感心したのは、西田さんという人は弟子が非常に多かったのですが、その弟子のだれも採らずに、田辺元という無関係な人を迎えたことですね。そのころ、田辺先生は二十代ぐらいでしょうが、その論文を見て感心され、講義のときに誉めて、こういうことを言っている人があると紹介された覚えがありますね。それから田辺さんがくることになったんですね。ところが、西田さんの「巾着」みたいになっていった連中がそれに反逆しましてね、必ずしも田辺さんは居心地がよくなかったと思うんです。

台北の印象

生江 先生は、東京文理科大学の創立のときに、大塚へお戻りになったんでございますか。
務台 京都にいたときに台北帝国大学が出来たんです。その準備時代に二年ばかりドイツに行きまして、台北大学の創立第一年の教員になったわけです。そのうち、東京文理科大学が昭和四年にできましたね。ぼくにといい話が出たのでだけでも、留学から帰って来たばかりでしたから、三年ぐらいかかりましたよ。半年、文理科大学に行き、半年、台北大学に行くという生活を三年やりました。三年目に文理科大学の専任になったわけです。

生江 台北のご印象はどうでございましたか。

務台 私のいたころ、ちょっとした変化がありましたね。前は軍人支配をやっていたところが、こんどは文化政策になって大学を建てようということが起こったのです。その直後ですから、「霧社事件」(昭和五年、台中省霧社の高砂族が、日ごろの官憲への不満から日本人を襲撃し、討伐された事件)などが起こったりして、必ずしも平和ではなかったけれども、一般にはたいしたトラブルはありませんでしたね。

生江 私は戦後、二回ほど台北へ参りましたが、日本そのままですね。小学校も敷島小学校とか、日本名を使っております。台北の方がたというのは親しみがあるというか――。

務台 四十代の方が日本の教育を受けた人です。

生江 台湾の統治を、文化政策に切り替えたのはよいことでしたね。

務台 ぼくらが見て、ひどいことをやっていたのは砂糖黍栽培ではないかと考えますね。ほかはわりあいよかった。

はじめは植民地として武断的にやってきたけれども、文化政策になって大学ができたところから、大騒動というものは起こらなかったですね。

生江 植民地という問題では、先生は、現在の旧植民地の解放と申しますか、民族の独立ということについては、たいへん共感をお持ちになっているように拝見するのですが、今のベトナム問題でもカンボジア問題でも、日本人が、ああいう問題に対してどういう心構えを持っていたらいいのでしょうか。

先生の場合には、絶対平和ということ（みんぱく）を標榜（ひょうぼう）なさるよりも、とくに、民族の解放という面に問題を――。

務台 日本人も幸福だった、台湾人も幸福だったというふうにゆけばいいと思うんですね。そういう道は為政者の胸中にあるわけですが――。そういう線を選ぶべきだということをずっと感じていました。

ちょうど四年ぐらいいなものですかね、台北帝国大学の専任としていたのは。あとは東京文理科大学ができたので、さよならと言って台北からこっちへ来ちゃったんですがね(笑)。

京都学派の人々

生江 先生は、『善の研究』などをお読みになれてから、哲学のほうへお進みになるといってお気持ちを固めたのでしょうか。それとも高等師範におはいりになるときから――。

務台 西田哲学というものが、何といってもぼくの「母体」になったわけですね。西田先生という人は、根は禅なんですよ。仏教的なんですね。学生については何をやらうとわりあい自由で、三木清とか戸坂潤とか、ああいふ左翼的な連中が一高から京都へ来ましたがね、そういうことは、ある点までは許していたところもあったわけですね。

生江 いろんなお弟子さんが、たくさんお出になりましたね。私たちが務台先生に教えていただいた昭和十四、五年のころは、ちょうど末期的な戦争突入の時期なのですが、あのころ『中央公論』などに西田門下の方がた、たとえば高坂正顕さんとか西谷啓治さんとか高山岩男さんとか京都学派と呼ばれた方たちがよく執筆されましたね。『世界史的立場と日本』という座談会などがありました。

務台 ええ。

生江 ああいう方がたとは、また別に先生はお考えになっていたのをごいいますか。

務台 そう、昭和二十年か二十一、二年ぐらまでは、ぼくも接触していました、あの連中

と。ただ、あの人たちは「京都趣味」なんですよ。ぼくはずっと東京へ来ていて、わりあいよくいろんな人と接触したわけですね、右翼も左翼も。そのうちに西田先生が昭和二十年に亡くなられ、田辺先生は軽井沢に引っ込んだし、てんで勝手に会ったりしていました。

全国でたった二つの学校

生江 先生がお話になったことで、「日本人は自然に対してあまりきびしく接することがなく、非常に調和的に自然にはいり込もうとしている。外国の場合には人間が自然に対してきびしい対立を持っている」といわれたことを、私は今でもうろ覚えに覚えているのですが。

務台 その考えは、今でも続いているんですがね。

ぼくは長野県の生まれでね、自然の中で大きくなったわけですが、実は中学校も出ていないんです。高等小学校から入って三年やれば卒業するという郁文学校というのが松本にあって、そこを出たんですよ。これは時代に合わずにととう潰れてしまいました。英・漢・数を主にして、それに歴史を加えたような科目を三年やったら英・漢・数では中学でやることはできませんかというような、変わった考えの人がいましてね、松本藩士の堀内という人ですが。だから、資格はないわけです。資格がないから正教員になれず、ぼくは代用教員をやりましたね。それから、苦し紛れに無資格でもはいれる学校はないかという調べたんですよ。とに



ありし日の大塚の正門 東京文理科大学・東京高等師範学校のおもかげ

かく官立も普通の私立大学もだめなんです。中学とか高等学校とか、正式の学校を出てないと入れないんですね。そうでなければ選科生にならないといけない。

ところが、国立学校の中にたった二つだけあった。満十八歳で学校所定の試験に合格した者を入れる学校がね。一つは東京高等師範で、一つは江田島の海軍兵学校でした。二つしかないということは、そういう境遇を経たから調べがついたんですが、兵隊さんには向かないので、(笑)、高等師範学校にはいりました。それも教員になろうというつもりはなかったわけで、とにかく行くところがないのですからはいったのです。高等師範が門戸を開いていたので入れてくれたわけですが、その制度も三年ばかりでやめになりました。中学校か高等学校か師範学校を卒業しているか、検定試験を受けて合格した者でなければ入れないということになってしまったんですね。江田島の兵学校はわりあい長くやっていた。実際はいった人があったかどうかは知りませんがね。そんなわけで、二つのうちではいるとすれば教員向きだからというので、高等師範の試験を受けてはいった。とにかく英・漢・数はやっていたからよかったが、他は一夜漬けで勉強しました。全科目を一週間、午前、午後と試験をやったのですよ。しかし、中にはいったらいいさ無差別ですからね、かなりわが儘もしましたけども。

生江 あのころは予科が一年で、本科が三年だったのではないですか。

務台 そうです、四年です。

生江 予科で落第して、そのままやめる人も多かったという話ですね。

務台 ぼくは予科にはいらなくて本科にはいったわけです。予科は一般学をやり、本科三年で専門をやったが、ぼくは国漢。

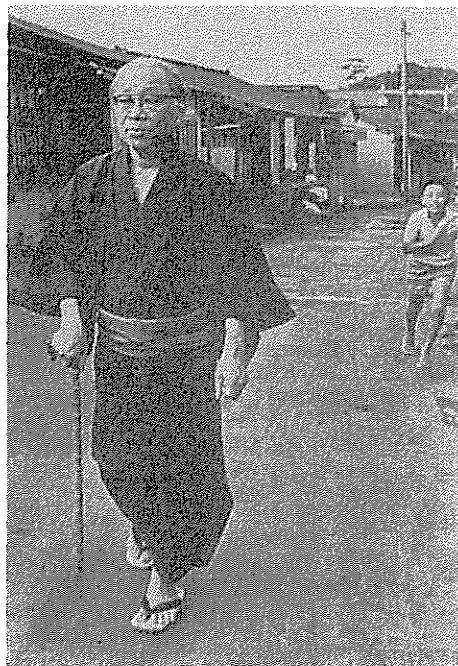
小さな先生が一躍大きくなる

生江 先生は、国漢をおやりになったのですか。

務台 ええ、国漢を出たんです。当時、国漢には非常にいい先生がいたのです。小島先生とか佐々先生とかね、一流の。

生江 『大漢和辞典』の諸橋轍次先生も――。

務台 諸橋先生は付属中学校の教員をしておられました。高等師範のほうへは、まだ出ておられなかったですね。ぼくがいたころの国漢のいちばん上は林先生ではなかったですかね。この先生はシナの――。



下町を行く山本周五郎氏

撮影 杉山吉良

務台 ええ。周五郎はちょっとつむじ曲りでしょう。彼は一徹に江戸時代の庶民を書いていく。同情をもってね。あれが好きなんです。浦安というものを教えてくれたのは山本周五郎ですよ。あの浦安には、実際、山本周五郎は生きている。彼は商業学校を出ただけで、それも自分の力ではなくて築地にいる叔父さんから学費を出してもらったのです。商業学校を出てから、文学が好きで、浦安へ行って、三、四年いたんです、青年期に。それをずっと温ったため、三十年もたってから、『青べか物語』とか、浦安ものといわれる作品を書いて出したわけです。あれを読むと、ぼくが浦安へ行っていないんですね。

生江 先生は、浦安にもお住まいになったのでしょうか。

務台 浦安にいたことはありません。しかし、始終

生江 亀甲文字でございすか。

務台 ええ。先生は猫背の小さい先生でしたが、その話になると一躍大きくなってね(笑)。

生江 そのあと、亀甲文字の研究は京都大学の貝塚茂樹さんが――。

務台 貝塚茂樹などは、ぼくが三高の教員をやったときの生徒ですよ。

生江 そうでございすか。貝塚さんが終戦直後に股の亀甲文字を中心に『中国古代史学の発展』というご本をお出しになりましたね。私も終戦後、東北大学に派遣学生で行っていました。貝塚さんのご本を読んだりいたしました。

務台 ぼくが三高の教員をやったとき、貝塚は三年にいましたね。あのころはずいぶん秀才がいたですよ。中野好夫だとか下村寅太郎とか。

生江 そうでございすか。先生のように長いこと教員生活をおやりになりますと、いろいろな教え子が――。

務台 とにかく教員としていろんな種類の学校をやりましたね。尾さんの教育までやりましたからね。

つむじ曲りの一徹もの

生江 先生は、山本周五郎さんのものがとてもお好きなのですが。

行っていたから、たいてい知っていますよ、あれに出てくるのは。

生江 山本周五郎さんの、江戸庶民の苦しみと、その苦しみの中に何かしら一つの救いを追求してゆく点に共感されたわけでしょうか。

務台 それと、負けん気を持っているところね。

生江 今、ああいうふうな気持が、日本人の中にもう一回よみがえってこなければいけないのではないのでしょうか。

務台 周五郎という人は、家が貧しくて上級学校へあげてもらえなかったから、小学校を出ると叔父さんのところへ行って、その書生みたいなことをやり、叔父さんの世話で商業学校を卒業して小説家になった人ですよ。

親鸞のみち

生江 先生。日本人には、西洋人と違って絶望ということとは、ほんとにないのではありませんか。

務台 西洋的な絶望はありませんね。一つは、仏教の影響があるだろうと思うんです。仏教というのは、どこかに救いがあるんですね。最後に人間を棄ててしまうということはないのです。そこへいくと、キリスト教は邪教を許さないでしょう。

生江 西洋では、キェルケゴールの『死に至る病』のようなものが西洋文明の一つの危機に於いて出されるとか、あるいはニヒリズムとかがありますが、日本でそこまで徹底できないのは、やっぱり仏教というものの――。

務台 仏教の影響が大きいと思いますね。日本人がほんとうに宗教というものに接したのは仏教ですからね。神道はあとからできるのですよ。

生江 私も親鸞のことを少し勉強したのですが、親鸞が東国に行ったということに、先生は非常な意味をお持ちのようでございますね。

務台 持っています。親鸞が東国に行ったということは、非常にふしぎなんです。京都からは帰ってきてさしつかえないという許しが出たのですからね。法然が土佐へ流されるのと同じように、親鸞は越後へ流されたのですがね、高田の近くに。おそらくあそこで妻君を見つけたのではないのでしょうか。今ではよくわからないんですがね。外から妻君をつれて行ったという説もあるし、京都では妻君を持っていたから違うんだという説もあって、きめ手がないのですが。とにかく妻君、子供三人をつれて信州路へはいり、碓氷峠を越えてはるばると常陸国へ行くんです。常陸国などというのは辺境ですからね。京都へお召しが来ているのに、それを拒絶して常陸国へ行ったということね。それも真宗の一つのガイスト（真髓）になっているのではないかと思うんですね。常陸国に約二十年もいて、六十五になって京都に帰りますけれど、京都に帰っても、お寺へはもういっさい寄りつかない。



愚亮親鸞「親の御影」とよばれる親鸞生前の画像

六十六歳からひとりで大谷に
住み住まいをして、どこに住
職にもならず、もちろん官位
にもつかず、京都ではほとん
ど説教をやっていません。説
教したのは、東国に四十四、
五歳から六十五、六歳まで二
十年いた——二、三カ所、場
所は変えています、そこに
いた当時の弟子と終始交通し
ていただけです。京都での説
教というのは一つもないんで

はいらない。だから本願寺があんなふうに行っているのは親鸞から見れば大墮落ですね(笑)。
生江 先生の親鸞のご研究を、もっと聞かせていただきたかったです、とにかく私たちが
これから教育を進めていくのに、もう一度「日本の原点」というものに立戻って出発しない
といけないと思います。そして、今の私たち自身が新しい日本の方向というものに対する確固
たる信念を持ってゆかないと——。

務台 親鸞というのは、本当に偉い人だと思っているんです。

生江 「親鸞は弟子一人もたずさふらふ」と言っていますね。
務台 公然と妻を持っていますね。
生江 その点が、人間的な中で一つの新しい道を開いていった親鸞の偉さですね。私は『教
異抄』の「法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべ
からずさふらふ」——こういう境地になりたいといつも思うのですけれども、なかなか——。

『教行信証』

務台 絶対の「信」だったのですね。

生江 私は教育を考えるとときには、親鸞の『教行信証』というものを、たえず頭に置いてい
るのです。教から行、最後に信。そういうかたちに、教育を持ってゆきたいのです。どうも、
今のわれわれは「教」だけあって、まだ「行」まではゆかない。ましてや「信」というふうな
ところまでは、なかなかゆかないと思っているのですが。

務台 なかなか、むずかしい問題ですね。常陸国へ行ったのは「行」だと思っただけです。臨
を結んで「僧に非ず俗に非ず」とね。六十五歳だか六十六歳のときに都に帰るんですけども、
どうして京都に帰ったかそこはよくわかりませんが、弟が僧都そうずになっていてるんですね。僧都の
力を得て、大谷に小さなボロ小屋を造って一生を終わらせたのです。寺というものには、一度も

す。

生江 西田先生も「愚禿親鸞」というものをお書きになりましたし、先生もずいぶん親鸞という人物をご研究になっておられますね。

務台 ほくが親鸞を研究したのは、西田先生の「愚禿親鸞」に因るのかもしれませんが。まともめることはなにもやっていませんがね。

人間としてみると、親鸞という人物は、日本人としては珍しい偉い人だったのではないかと思うんです。真宗というものが、ひとつの教団としていわゆる真宗らしくなったのは、第八世の蓮如上人からです。

生江 あの人は、相当な政治家みたいですね。

務台 そう、政治家だった。あれまでは、まだ一種の邪教みたいなものでしたからね、真宗は。

蓮如上人は「相手はみんな女房を持っているのに、こっちが女房を持たずに説教しても通じない。女房を持って初めて人間的な生活というものがわかる。その立場に立たなければ本当の説教はできない」というようなことを述べていますね。

生江 教育というものをこれから考える場合にも、やっぱり私たちは、親鸞上人のように教行信というか、そういう根本の問題にいくぶんかでも近づいて参りたいと、いつも自分では思っているのですが。

母校に、生涯をおくる

ところで、私は先生の思い出の中で、今でもはっきり覚えていることがございます。私が東京へ出て参りまして先生のお宅へ伺ったとき、ちょうど坊っちゃんが中学一年生になられ、そのとき先生は還暦におなりでした。私自身も、おやじが還暦のとき中学一年生でしたと申し上げたら、先生が「お前のおやじはいつまで生きた？」とおっしゃいました。そのころ、先生は坊っちゃんのことを相当「心配になっておられたようでございますね。その坊っちゃんも今、桐朋男子校の先生として活躍になっておいでになるし――」。

務台 ほかの道もあったかと思うんですが。私は母校にずっと生涯勤めて、出世は求めず、正しい教員になろうと思つてやって来たわけですが、仲間何もやらないのですけど、大過なく勤めさせてもらっているようですね。桐朋へ行ったことは、今考えるとよかったと思つてます。

生江 おかげさまで、桐朋の先生たちの多くは非常に長くいらしてくれます。十年以上という人がほとんど大半でございます。私も二十三年になりました。学校へ来ましたが、一年ぐらいい喧嘩して飛び出すんじゃないかなと思うような空気でございましたが、おかげさまでこうしてやらしていただいております、来年は創立三十周年なんでございます。

ところで、先生、お酒の方はまだおやりになるんでございましょうね。

務台 それは、あい変わらずで(笑)。

生江 いや、それが、私、非常に嬉しいんですよ(笑)。

務台 でも深酒はもうやりませんね。ぼくは数えて八十一になるんです。満でいうと今年の八月で八十才になるんです。だいたい、世の中の事もし尽しましたからね(笑)。あとは若い人の時代ですから、若い人がやれば良いと思っています。

生江 先生、大学騒動や高校問題については、どうお考えですか。

務台 大学騒動には若干の興味をもっていますよ。ただひっこんでいるばかりでもないのです。三派ね。あれがどういう風に動くかと思ひましてね。昨年、東大へ二、三回出て行きました。

着物を着て、ぶらぶらとやって行った。ところが、他の若い元気のいいやつらは巡査に止められて、僕のようにぶらっと行ったやつは入れるんですよ。巡査の一人がね、「あんたどこへ行く」——前の方はしゃ断してあるんです——「追分の方に」と言いましたら、「氣を付けてお行きなさい」と(笑)。

東大事件で筆を折る



あすへの期待 新しい市民教育への芽を

務台 三十周年にはお祝いにあがりますよ。

生江 ぜひどうぞ。

務台 中学・高校の先生というのはわりあい変わりやすいし、またよその学校へ行きたいという気持があるものです。うちの子供には、「桐朋はいいから、桐朋で一生送れ」と言っていますかね。

生江 先生はご家庭で、お子さんにはあまりおっしゃらなかったほうでございすか。

務台 子供にはあんまり言わないですわね。

生江 先生のお話を伺いながら、私ももう一回、最初に先生に呼ばれて来たころの気持になってやってゆかないといけないなと思っています。でないとマンネリズムに陥りますから。

務台 いや、あなたなら大丈夫ですよ。

生江 いや、どうもありがとうございます。

そこで、『世界』の編集長の縁川亨君にひよっと会いましてね。むこうでも驚いたんですね。彼がそこで何か感想を書けというのです。張り出しを見ようと思って見ていたら、折原浩の書いたものが東大の収拾策としていいのではないか——そういうことで、このとき『世界』に小さいものを書かされたのが、文筆のおしまいでしたね。講演にも昨年から出ていません。学生はまだ若いと思っているのだね（笑）。話してくれと言ってますが。

生江 いや、先生はまだお若いですよ。もっともっと教えていただかないことには。

務台 『世界』に書いたあとは、筆を折ってしまってますね。今はひとの話を聞くことと、新聞を見るくらいですね。

生江 本はお読みになっていらっしやいましょうか。

務台 本もね、洋書は、この部屋いっぱいあったのを、慶応大学に寄付してしまいました。慶応に十二、三年いたのですね。教育大学にしようかとも思ったのですが、教育大だと本が二重になってしまふ。慶応の方は古代、中世と現代が多くて、その間の十八、九世紀が少ないので寄付したのです。

生江 これからの、おしごとのご予定はいかがなものです。

務台 そう、岩波新書で、続きものを書いてくれないかと、今頼まれているんですがね。書けませんね。自信がわいてこないんです。書こう、こういうことを一つ書いてやろうというポイントがわいてこないと本は書けませんね。ポイントが以前のように明確に、目の前にぶらさ

がらないですね。

生江 お酒でも召しあがっていただいて、先生に元氣をお出し願わなくては。

桐

III

昭和45年7月

務台先生と民俗学

和歌森太郎

務台理作先生は、私が東京文理科大学に入学を志したところに、台北帝大から転任されてきた。哲学界においてすでに高名な、りっぱな少壮教授という評判だった。

私自身は国史学専攻の道を選んだのであるが、務台先生の「哲学概論」の講筵に待した。

「哲学とは何か」から始まったこの講義の魅力は、太したものであった。先生自身が教壇上で思索をめぐらし、独り言のように仰っしゃるのが、そのまま実に筋道だった講説になっているのである。

私は文理大に学んだことを誇らしく思い、幸せに感

じるような、多くの先生方に接したのであるが、務台先生はその代表的な師である。

先生は、私が在学中に「伝承文化について」発表された。これは昭和十三年に刊行された『表現と論理』という著作に収められているが、その内容は、じかに大学の中でうかがったこともある。

先生はそこ、橋浦泰雄、最上孝敬、関敬吾氏ら杉並区界隈の民俗学者と、毎月一度の民俗学にかんする談話会に、中野好夫、谷川徹三氏らとともに会談する機会をもっておられたのである。この会は、今日まで続いている「西郊民俗の会」である。別に民俗学者になろうとされたわけでは、もちろんない。諸氏の話を傍聴しつつ、ご自身の哲学的世界に、民俗が展開する伝承文化の位置づけを、静かに試みていられたのである。もとより、柳田国男先生のそれまでの多くの著述にも親しまれた上で、その学統を伝える方々とも接近されたのである。

私は、当初余り民俗学には興味を寄せない史学の徒であったが、肥後和男先生の誘掖もあった上に、務台

赴き、直接民俗学の勉強をしようかなと考えるに至った。ついでに務台先生に御意見を聞こうと考え、或る日曜日に杉並のお宅に参上した。

先生はそのころ考古学にも関心を寄せられていたらしく、きれいな弥生式土器をどこから入手され、これを愛撫されながら考古学の話若干された。そして私の問題については、「柳田さんという人は、教えを求めに来るものを、まったく自分に包みこむ。そこに出入りするならば、柳田さんの方法だけを固く守る決意を要する。柳田さんは、それぞれの学問的立場により違ってやって、それなりにひきあげてやるという指導はしない人だ。その点よく考えてから、出入りするならばする、とりこになりたくなかったら、控えた方がよい」といわれた。

結局私は、一応とりこになろうと覚悟して、柳田門下になったのだが、務台先生の柳田観は、じつによく的を射ていたと、その後いよいよ思うようになった私である。

哲学にめぐらばるに意義づけられた伝承文化へ、力強くひきつけられたところから、進んで民俗学にもこむようになったのである。民族文化の基体としての基層文化、伝承文化が、個性的、一回的な表層文化現象を支えるものとして、重要な意味をもつものだということをさとされたのは、務台先生である。私の「日本民俗学」観は、まったく先生の示唆によって啓発されたもののなのである。

大学を出て助手に残っていたあいだにも、先生のその面での話をよく聴講した。当時「種々の社会の質料契機としての伝承文化」という見方で、先生の伝承文化論はひとときわ深められていた。その論は、弘文堂の教養文庫の『社会存在論』にふくめられたが、哲学界では大きな論議をよんだもののようである。

とかくディレッタンティズムにおちいりがちだった当時の民俗学界にも、こういう務台理論がしんけんにかえりみられるべきだな、と私はつくづく思ったものである。

その後私は戦地に出かけて、中途帰郷してから、ブラブラしていた関係で、ひとつ柳田国男先生の膝下に